

テーマ：日本のテキスタイルデザインの歩みと未来への期待

新しい協会が設立された記念すべき日にあたり、過去を振り返って、戦後50年間の繊維産業の盛衰と共に、テキスタイルデザインの移り変わりを手短かに話したいと思う。

日本は戦後の荒廃の中から立ち上ったわけだが、その土台になったのが繊維産業だった。占領軍（GHQ）は日本の壊滅的な産業の中から紡績業に的を絞って、その復活を計り、輸出を振興して外貨を豊かにすることにより、日本の産業全体を徐々に復興させる政策を取った。そうしたGHQの後押しと、その後起った朝鮮事変による特需景気の背景もあって1950年から10年間に、日本の紡績産業はたちまち飛躍的に伸びた。そして、広巾の生産により、デザインの方でも従来の着尺から広巾へと傾き、1955年頃からは、従来は先染、ジャカード中心だったカーテン、スカーフ、ハンカチ等がプリントを取り入れるようになり、ここにプリントデザインの萌芽を見る。プリントカーテンが戦後の日本の住宅の窓を飾るのもこの頃からである。やがてGHQの占領軍の下受け、賃加工、とどまらない自由貿易の時代を迎え、輸出振興の波に乗ってプリント（デザイン）が積極的に取り入れられ、1960年代はあらゆるものにプリントが導入され、プリントデザインが質量共に、劇的に充実した時代である。そしてその頃、繊維意匠センターが発足されるのであるが、これは当時、日本のデザインは外国のイミテーションであるという非難が起り、外交問題にまでなったため、その外圧によりできたのである。これは日本のデザイン意識と海外のそれとの違いが著作権に対する認識に於いて異なっているからである。輸出振興に伴わない海外から沢山のデザインを買うようになった。それはデザインを買うのではなく著作権を買ったという認識が必要だ。日本ではデザインは生産されない限り保護されない。つまり工業所有権として認知される。そして企業とデザインは切っても切れない形で発展した。その後、繊維意匠センターは、コンクール等を通じてその後の人材育成に大いに貢献することになる。1965年からプリント最盛期は又、天然繊維から合成繊維への移行も盛んになり、海外のブランドを取り入れたりと、海外との繊維取引の信用の問題を抱え、通産省の指導を仰ぐようになった。



そして、既製服産業の隆盛と共に繊維産業の構造的変化をきたし、アパレルデザイナー主導の元にテキスタイルはその下受けを果さざるを得なくなる。つまり、アパレル産業の発展をテキスタイルデザイナーが支える時代を迎える。しかし、その相互の関係はスムーズではなく、テキスタイルデザイナーの困難な時代を迎えるのである。'75～'85年頃のことである。そして、ファッションビジネスが盛んに言われ、この時代テキスタイルデザイナーは、ただ絵を描いているだけでなく、ファッションに対する提案、企画するという提案型のビジネスに変身していかうとする。1985年から10年は、日本の繊維産業の構造が一度に変わろうとした10年である。

コンピューター、コピー機などの発達により、デザインの仕事、企画の仕事の中心にこれを活用せざるを得なくなる時代となる。この時期はテキスタイルデザイン混迷の時代、変身の時代、革新の時代だと私は思う。そして'95年の今日ここに日本テキスタイルデザイン協会が誕生したわけである。これからは、単にテキスタイルデザインというものを狭い分野にとどめず、もっと開かれた視野に立って、総合的な役割を果すよう期待する。